



もうなかない
で



木花もみじ

相変わらず大きなお屋敷だった。

雛見沢村で目立つ大きなお屋敷といったら、御三家と呼ばれる園崎家、古手家、公由家のお屋敷にほかならない。

その御三家のうちのひとつである園崎家のお屋敷に私は今日、招かれていた。

「まま、そんなに遠慮しないであがってよ」

いつもと変わらない様子で先に靴を脱いで玄関口へとあがった魅いちゃんに声をかけられて私は小さな声でお邪魔しまあす・・・と呟いた。

魅いちゃんのおうちに遊びにくるのは初めてではないのだが、どうもこの独特な空気には慣れない。ゆっくりと靴を脱ぎ、靴を揃えて、少し冷たい空気の流れる廊下を足早に進んでいく魅いちゃんの後姿を見失わないように小走りでついていく。

「冷たいお茶でいいかな？それともあったかいのでいい？」

「あ、おかまいなく」

「何、なんでそんなに他人行儀なの？」

苦笑いして魅いちゃんが私を見つめる。奥ゆかしい昔ながらの屋敷造に驚いているというか、落ち着かないというべきか。私はそんなことないよ、と返事をした。暫くしてコップに冷たいお茶を注いだ魅いちゃんが出てくる。

「今ね、婆っちゃんがおはぎの下ごしらえしてくれてるとこだよ。餡がそろそろできたみたい」

「そうなの？魅いちゃんのおばあちゃんのおはぎ、すごくおいしいんだよねえ。はうう、涎でてきちゃった」

「あはは、そういってもらえると婆っちゃんも喜ぶよ。・・・それでね、レナ。圭ちゃんのことなんだけど」

「あ・・・うん」

今までの空気が一変して淀む。互いに表情に陰りが見えた。圭ちゃんというのは、圭一くんのこと。少し前に雛見沢村に引っ越してきた、前原圭一のことだ。

私と同じ年で、魅いちゃんからはひとつ年下。引っ越してきてから毎朝おうちにお迎えにいったりあげたり、魅いちゃんが部長をつとめる部活と一緒に遊んだり、男の子だから女の子ばかりの友達と仲良くできるか心配だったけれど、圭一くんは本当に面白くて、楽しくて、毎日がいつも以上に幸せに過ごせていた。けれど。

「今日、風邪でお休みだったね・・・はう、最近圭一くん部活にも出てくれないし・・・どうしちゃったんだろ？」

「うん・・・おじさんも心配でさ。その・・・アレがあったから。やっぱり・・・なんていうのかな、怖がるんじゃないかって思って」

アレ。

あえてそれがなんのことなのか口にしない魅いちゃんから気遣いが見えたのと同時に、私の前でそのことを口に出すのが憚れるといった様子が伺えた。・・・あのことについて私は一度だけ魅いちゃんに食ってかかったことがある。私の態度が異常だとそのときの魅いちゃん目が言っていた。だからこそあえて口にしないのだろう。

私自身、異常と思われたり、扱われたりすることには慣れている。慣れてはいても、腫れ物を触るみたいな話題の取り扱い方に少し苛立ちを覚えた。

「大石が圭ちゃんの周りを嗅ぎまわってるっていうのも聞いたんだ」

「大石さんが？」

「うん。アイツ、きっと圭ちゃんにあることないこと吹き込んで怯えさせてるんだよ」

大石さん、というのは興宮署の刑事さんで魅いちゃん、いや園崎家の仇敵みたいなものだ。それは互いに感じていることでアレについて執拗に食いかかってくる。私もあまり好きにはなれない老獪さの滲み出た人物だ。

「今日もね。お昼に興宮の方で圭ちゃんのこと呼び出してなんか吹き込んだみたいなんだ」

「え、風邪でお休みなのに？」

「どうせ強引に連れ出したに違いないよ・・・。親戚のおじさんが見たらしいんだけど、圭ちゃん顔色悪そうにしてたっていった」

心配そうに魅いちゃんが目を伏せた。私も圭一くんのことだ。以前、こんなことがあった気がする。誰かに似ている。その誰かというのはもうわかっている。きっと時が経ていくにつれて同じ道を辿っていくような気がしてならない。そして辿っていったその先に待ち受けるのは何か私たちにはわかってる。

「ご両親も出かけちゃってるみたいでさ、一人だと何かと不安だろうからちょうど婆っちゃんがおはぎ作ってくれたし、それもお見舞いにでもいこうよ」

「あ、そういえばおばさま、スーパーで会ったときに言った。圭一くん、お料理できないし、一人でお留守番なんかできるかしらねえって」

「あはは、圭ちゃんのことだから心配だねえ。しっかり風邪を治して、明日には学校にきてもらわないと部活が面白くないもんね」

「そうだね、だね！」

不意に居間の襖が開く。開いた先には、園崎家の頭首であるおりょうさんが立っていた。

「なんや。騒がしい思ったら、レナちゃん、来ったんかいね」

「お邪魔してます、すみません騒がしくて・・・」

「ええわええわ。今、おはぎをこしらえとったところじゃ。食べていきんさい」

「はうう～ありがとうございます」

「台所に置いてあるけんね。ちょっと外にでる用事があるから、好きなだけ食べとき」

「ありがと、婆っちゃん。んじゃレナ、台所いこっか」

「うん」

おりょうさんはいつも仏頂面で、何も言わないことが多いのだが、時たまこうして園崎家を訪ねるとこんな風に優しく接してくれる。きっと本当は優しい人なのだ。優しいけれど、残酷で。だからたくさんの人に誤解を受けて、でもそれを解くのに頑固だから色々苦勞をしているに違いない。

台所につくと、すでに握ってあるおはぎと、大きな桶にもち米が少量、さらに餡がお鍋の中に少し残っていた

。魅いちゃんが手ごろな箱をどこからか見つけてきて、握ってあるおはぎを選別している。

「圭ちゃんは男の子だからなあ、食べ盛りでしょ。おっきいのがいいよね」

べろりと口の周りを舐めながら、本当は自分が食べたそうというのを必死に押し隠して魅いちゃんは圭一くんのためにおはぎを選んでいて。私がおはぎの様子を眺めていると、思いたったように魅いちゃんが手を叩いた。

「—そうだ。これ、部活にしよう」

「へ？部活？」

「うん、圭ちゃんこのところ部活休みがちだし、きっと一人じゃつまらないでしょ？だから部活にするの」

「ふええ、どういうこと？」

「う～んと。そうだ、まだ材料余ってるからレナ、おはぎ握って！それでどれがレナが握ったおはぎでしょ～う？っていうクイズ問題にしよう」

「あはは、それ面白そう！」

「でしょ？・・・もちろん、わからなかったら罰ゲーム！」

ふふんと胸を張って魅いちゃんが得意そうに宣言した。なんだか罰ゲームありきで考えていたようで、そんな魅いちゃんの考えることが面白い。

「あ、ついでになんか混ぜておこ～っと」

「それじゃあすでに罰ゲームが混ざってることになっちゃうよお」

「いいじゃんいいじゃん、いっひっひ、これ食べる圭ちゃんの顔が目浮かぶう！」

とっても嬉しそうに魅いちゃんはおはぎに何かを混ぜ込んでいた。おそらく魅いちゃんのことだから、そのあたりにあったタバスコを混ぜたのだろう。レナのおはぎを当てるクイズでどうしてもすでにタバスコが混じっているのか。これじゃまるでロシアンルーレットなのだけれど、魅いちゃんがとっても嬉しそうに妄想していたのでそこは突っ込まないでおいていた。

「お、さすがレナだね。性格が滲み出るようなきれいなおはぎ」

「ちょっと小さいかな。魅いちゃんが選んだおはぎ、どれもおっきいからバレバレじゃないかな・・・」

「でもほら、圭ちゃんって結構頭良いでしょ。こんな風にあからさまに違うおはぎが入ったら裏をかいてこれか？ってなるって」

「うーん、そうかも。圭一くんって用心深いし」

「だからこれで準備万端OK！おや、もうこんな時間だね。そろそろお見舞いにいってあげようかね」

「えへへ。楽しみだね。ワクワクしてきちゃった」

おはぎをもって、私たちはすこし夕暮れどきの雛見沢を歩く。圭一くんの家はそれは立派だ。雛見沢村にはない今時のおうちだった。

玄関口に二人で並んで魅いちゃんが呼び鈴を一回鳴らす。ピンポーン。その音の家全体に響いたのがわかった。が、暫くしても返事がない。

「ありゃ？寝ちゃってるのかな？」

「はう、寝てるんだったら無理に起こしちゃ」

ピンポーンピンポーンピンポーン。止める前に魅いちゃんが高速で呼び鈴を押した。家に人がいるなら焦らせるのに十分に催促できる速さだ。意地悪そうな顔をしてゲームのボタンを押すように呼び鈴を鳴らす。

「どちら様ツッ」

こんなに鳴らされて不機嫌にならない人はいない。少し寝癖のたった髪型と、軽いラフな格好で圭一くんがドアを乱暴に開けた。

「やっほー圭ちゃん！」

「はう、圭一くん・・・こんばんは」

一瞬圭一くんの顔が引きつったのがわかる。開けたのは失敗だった、といわんばかりに。魅いちゃんは気づいていないようだ。

「何、だ・・・魅音に・・・レナか。何か用か？」

「ありゃ？つれないねえ」

ぶう、と魅音が口を膨らませる。その言葉には拒絶の気持ちが含まれていた。私は拒否されているのを感じてしまい、上手く言葉が出ない。

「圭ちゃんがガラにもなく学校休むからさ。お見舞いにきてあげたんじゃん？」

「沙都子ちゃんも梨花ちゃんも心配してたよ・・・」

この場にはいない部活メンバーの二人も圭一くんのことを心配していた。沙都子ちゃんは遊び相手になってくれる圭一くんの不在につまらなさそうにしていたし、梨花ちゃんは皆とはまた違う心配をしていたような気がする。いづれにしる皆が気にかけているのは変わらない。

ただ息を飲み、何も言わない圭一くんはやっぱりどこか調子が悪いのだろう。私は手にしていた重みのある袋の存在を思い出して、圭一くんに手渡す。

「・・・これ、魅いちゃんとレナからのお見舞いだよ」

ずしり、と手にかかる重さに圭一くんは驚いている様子だった。

「うわッ、なんだよこれ？」

「うちの婆っちゃんの特製おはぎだよ」

得意そうに魅いちゃんが言うので、さらに私も続けた。

「この中にレナの作ったおはぎも混ざってるんだよ。圭一くんに見つけられるかな？」

「そうそう。そこで！部活を欠席して圭ちゃんへの宿題！この中に入ってるレナのおはぎがどれかを当てること！それぞれにアルファベットが書いてあるから。それで答えてね！」

「お前らなあ・・・部活なのかお見舞いなのかどっちにかしろって」

呆れた様子で呟いた圭一くんは、いつもの様子に見えた。だから私は安心する。魅いちゃんもその表情に気づいたらしく嬉しそうに笑っていった。

「ヒドイ風邪じゃないみたいだね。よかったよ」

「魅いちゃん、長い間お邪魔しちゃうと圭一くんも疲れちゃうよ」

「そだね、また明日にすっかね」

いくらこうして立って話し込めるといっても相手は病人なのだ。あまり長話につき合わせてまた体調を崩したらお見舞いにきた意味がなくなってしまう。お見舞いの品は渡したし、圭一くんにも会えた。だからそろそろ帰ろうと促したのだが魅いちゃんが圭一くんに近寄っていった。

「そいえば圭ちゃん」

「ん？」

「お昼何食べたの？」

お昼は大石さんと一緒だったはずだ。魅いちゃんなりに何を吹き込まれたのか詮索したかったのかも知らない。圭一くんの血の気が引いていくのがわかった。

「お・・・表で食べたよ」

別に嘘をつく様子もなく。ただ大石さんと一緒だということは言わずに。ただ淡々とそう答えた。

「ふうん。外食だったんだね。おいしかった？」

特に意味はなく聞いたのだが、圭くんはまた息を吞んで何も言わなくなってしまった。魅いちゃんが少しからかう様子で続ける。

「渋いオジサマと一緒にようだったけど、誰？」

大石のことを中々口にしながらないので、あえて遠回りに聞いたのだろう。悪意などそこにはない。もし大石からこんなことを言われた、あんなこと言われた、というのであれば大石ばかりの話ではなくこちらの話も汲んでもらって話の本来の筋を通すことも必要だ。

「誰かなあ？」

問いかけるが、答えはない。大石が口止めでもしているのだろう。

「答えられないなら、レナが教えてあげるね。こないだ車の中でお話してた人だよな？」

そう。

圭くんは部活中に大石に呼び出されていた。気になって様子を見ていたら、車の中にまで連れ込まれて話を聞かれているじゃないか。おそらくアレのことかもしれない。まだ雛見沢村にきて日が浅い圭くん、起きた事件のあらましを話して、雛見沢について悪い方向でしか話していないに違いないのだ。

「・・・何で・・・そんなこと、わかるんだよ・・・」

必死に搾り出したような声で圭くんが言う。

「さあてね。おじさんにはわからないことはないからね」

くっくっく、と乾いた笑いと一緒に魅いちゃんが言う。園崎家次期頭首という肩書きを背負っているだけあって、時々こうした大人の凄みを見せるときが魅いちゃんにはある。それを圭くんに見せるのはやはり、間違えた方向へ導かないためなのかもしれない。

「そのとき圭ちゃんだいぶ熱くなってたみたいだけど、何の話をしてたの？」

店内に響き渡るくらいの大声で圭くんは叫んでいたらしい。きっと・・・私たちの過去について何か知らされたのだろう。それら全ては今回のアレに繋がる。私だって何度か考えたことだ。だから新しい事件のはじめに、まったく知らない圭くんが色々吹き込まれたりしたら、それを信じざるを得ないこともわかる。

「魅音にもレナにも関係ないよッッ!!!」

圭くんはその時叫んだのと多分変わらないであろう叫び声をあげた。切羽詰まると声が大きくなってしまふのが彼の癖らしい。彼が追い詰められているのがどことなくわかるのに、なんだか信じてくれないのが悔しくてならない。

「聞いてもいないのにレナたちの名前が出るなんて怪しいなあ」

圭くんが信用してくれていないのがわかる。

だから責める。わかってほしいと願うよりも、どうして信用してくれないのかがわからない。だから自然と彼を責めるような口ぶりになってしまう。

「ま、何を隠れてやろうとも」

大声を出して肩で息をしている圭くんに向かって、魅いちゃんが一呼吸置いて言う。

「おじさんにはすべてお見通しってこと。それを忘れないでくれればいいかなあ？」

きっとこれは魅いちゃんの警告というわけではなく。私はなんでも知ってるぞ～という単なる自己アピールみたいなものだ。それは屈託のない笑顔で笑って言った魅いちゃんの顔を見ればわかる。

「圭くん、顔色悪いよ・・・もう横になったほうがいいよ？」

散々言葉遊びに付き合わされて、疲弊しているだろう圭くんを気遣う。

「そうだね、私たちは帰ろう」

魅いちゃんも長居しすぎた、というように踵を返した。私は先に玄関を出る。魅いちゃんが扉を閉めようとした際に、扉の隙間から向こうを覗いて何かを言った。

「なんて言ったの？」

「学校休んじゃだよーって。明日には今日のおはぎの感想聞かなくちゃね」

嬉しそうに魅いちゃんが言った。もう夜になっていたもので、水車小屋あたりの分かれ道で魅いちゃんと別れる

明日は圭一くん、学校にこれるといいね。
——そんなことを話しながら。

ひとつ、ふたつ。

あなたの瞳から零れる涙と一緒に振り下ろされる腕。

痛みを与えられる恐怖から私は一瞬瞼を閉じる。

でも恐ろしいことに段々と。痛みは慣れとでもいうのだろうか、ずっと引いていく。

—ごめんね。

——ごめんね。

私はあなたの痛み、悲しみ、わかってあげられなかった。

わかるフリをして、また同じ過ちを繰り返してしまった。

もう二度と人の苦しみにから目を逸らさないって決めたのに。

「うわああああ！！！！！！！！」

目の前の現実から逃げたくて、彼が叫んでいるのがわかる。鼓膜を響かせ、染み込むくらいに怯えているその声が私の脳内を支配する。

「・・・怯えないで・・・」

「くるなっ、くるな・・・！お願いだからっ・・・」

「ねえ、何も怖くない、・・・よ」

喉の奥から血の味がし始める。呼吸がしづらくなって、鼻で息をすれば生臭い血の匂いがするばかりだ。

・・・魅いちゃんはきっと、もう動かない・・・。

咄嗟に振り下ろされたあの一撃だけで、もう動かなくなってしまった。あんなに優しく笑っていた魅いちゃんは、今はただ私のそばでうつ伏せになって転がるだけのただの人形だ。

手を伸ばす。骨が軋んで、痛い。腕がこんなにも自由が利かないなんて初めてだった。

だんだん、彼がどんな表情をしているかわからなくなる。ボヤケテイク。全てが嘘であってほしい。そう願う私へのご褒美なのかもしれない。

空気を切る音がした。

彼が振り上げたのだ。身体中にもう、何度も何度も打ち付けられた金属バットを。先端はすでにひしゃげていて、赤黒い血がべったりとついている。

「ごめんなさい・・・」

痛い・・・身体が。

痛い・・・心が。

きっと私にはたくさんできることがあった。私たちは過ちを繰り返さないためにできることがたくさんあった。でも痛い。全てが痛くて・・・許しあえる奇蹟があるなら私は願う。

どうか・・・またもう一度。

彼に出会えるのなら。

今度はきっと大丈夫・・・世界が虚ろに見えている。もう流す血もない。次に振り下ろされる一撃で私は終わる。絶命する。

うまく・・・見えないけど。

わからないけど・・・伝えたい。最後に。

「私を・・・信じて・・・」

振り絞った言葉は宙を舞い。
振り切った彼の凶器にかき消され。
私の身体は虚空を舞って、すでに事切れた人の身体に重なった。

彼は泣いていた。

そこに置き去りにされたのは何だっただろうか。
ただ、信じあうことができなかった私たちの、紡げなかった私たちの間違いがそこにあるだけだった。

あなたと歩いた雛見沢の道。ひぐらしがなく、茜色の空を見上げて。意地悪そうに私の頭を撫でるあなたの大きな掌。

いつしか頬に触れた手からあなたが離れていく。怯えないようにしていたのに、怯えさせないようにしていたのに、私がしていたのはただあなたの心を蝕むだけのことだった。

私を見つめる涙に濡れた瞳が悲しい。
ただ悲しい。

痛い、痛いよ・・・
痛い、痛い・・・
痛い・・・

ううん、圭一さんの痛みはこんなのじゃなかった・・・もっと、痛かった。
もっと、もっと辛かった。
どうして、気づかなかったのだろう。
あなたの痛み、代わってあげられなくてごめんなさい。
レナは弱くて、あなたの優しさに甘えることしかできていなかった。

前は死を受け入れてた。
死ぬことが怖くなんかなかった。
生きることが現実なら、死ぬことで現実を拒否することができるなら私は素直に受け入れることができた。
こんな私なんか壊れてしまえばいいと本当に思った。

でも今は。

死んでしまうことがとても怖い。

嫌だよ・・・圭一くん・・・

この気持ち・・・

ずっと続けばいいのにと思っていたこの気持ち・・・

・・・あ・・・なんだか・・・今、・・・わかった気がする・・・

・・・うん。だから・・・今度ね・・・また、会えたらいうんだ・・・

恥ずかしいけど・・・ちゃんと、言うよ。

ねえ

圭一くん

大好きだよ。

だからもう

なかないで。

私が終わるというよりも、世界が終わるようだった。
景色が溶けてなくなっていくのがわかる。

そして、全てが暗闇に落ちた。